国　語　科

端名　秀雄
早谷　憲子
黒川　陸郎
研究協力者　金沢大学　山本　一
研究協力者　金沢大学　折川　司

１．ＥＳＤを進めるにあたって

本校国語科では，これまで「論理的な思考力の育成」をねらいとして，国語科における思考力・判断力・表現力の研究を進めてきた。平成 26 年度から学校研究としてＥＳＤに関わる研究を進めるにあたり，持続可能な社会の形成者として必要な資質や能力を「持続可能な社会を形成するための課題を，国語科で学習したことを使って解決する力と，国語科で学習したことを積極的に使おうとする態度」と捉え，国語科で育成してきた論理的な思考力を，教材や他教科とのつながりの中で使う力，また積極的に使おうとする態度を育成しようとしてきた。平成 26 年度は，持続可能な社会づくりの構成概念Ⅰ～Ⅵの中から，「Ⅰ多様性」「Ⅱ相互性」「Ⅲ有限性」の三つが教科の学習と関連づけやすいと判断し，関連する分野として「環境学習，生物多様性，地域文化財，国際理解，平和学習」（本校カリキュラムマップ参照）といった分野の教材を教科書から抽出し，教材の内容から他教科とのつながりを図る試みを行った。平成 27 年度は前年度の研究を引き継ぎ，教科間のつながりを目指したカリキュラム開発を念頭に，他教科とつながりを持った授業実践を通して研究を進めた。なお，教科としては「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」①～⑦のうち，①代替案の思考力，③多面的・総合的に考える力，④コミュニケーションを行う力　を中心的に扱うこととした。その結果，「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の育成は，国語科における思考力・判断力・表現力の育成と複数の点で関連付けできるものであると考えることができた。課題としては，他教科とのつながりを持つ授業は，あくまでも教科の目標を達成するための手段であり，双方の教科にとって意味のあるものにするためにより多くの工夫が求められることや，教材によってはＥＳＤの構成概念および能力・態度のいずれに関連付けるのがより適切であるか再検討する必要があることなどが挙げられた。

そこで平成 28 年度は，ＥＳＤの視点に立った学習目標「持続可能な社会の形成者として必要な資質・能力の育成」の研究を進めるにあたって，教科の目標達成を念頭に置きながら，これまで扱ってきた教材とＥＳＤの構成概念および能力・態度との関連付けを検討・再構築することを目標としたい。それらの検討・再構築を行うことで，より適切な学習指導の方法が見出され，研究副題にある「カリキュラムの開発」にもつながっていくと考える。

２．能力・態度の育成にあたって

（１）国語科の授業における能力・態度の育成について

平成 27 年度までの研究から，ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度の③多面的・総合的に考える力と④コミュニケーションを行う力の二つは，国語科で育成を目指す思考力・判断力・表現力等と特に密接なつながりをもつものであると捉えることができた。平成 28 年度は前項で述べたように，教材とＥＳＤの構成概念および能力・態度との関連付けを検討・再構築することを目標

としている。よって平成 28 年度は，ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度で中心的に扱うものを①代替案の思考力，②未来像を予測して計画を立てる力，④コミュニケーションを行う力とし，前年度までと同じ教材についてはその比較を主眼とし，新たに試みる教材については教科とＥＳＤの構成概念および能力・態度との関連付けを広げていくことを目標に，指導方法を工夫していきたいと考えた。なお，③多面的・総合的に考える力については，多くの学習活動の中に含まれる基礎的な力として共通事項という位置づけにした。

①代替案の思考力

ア　「事実」と事実に加えられた「意見」を見分けることができる。

：説明的文章の読解において，筆者の「意見」と「根拠」を分ける力。

イ　他者の意見をふまえて自分の意見を建設的に述べることができる。

：他の意見に対して賛成・反対の立場を明確にして根拠を示しながら意見を述べる力。

短歌の言葉を抜いておき，そこにあてはまる言葉を考える力。また，替わりに用いることができる言葉はないかを考える力。

②未来像を予測して計画を立てる力

ウ　過去や現在の情報に基づいて，未来を予想・予測することができる。

：古典の学習において，受け継がれる作品を読み，いにしえの人々の感性や考え方を自分自身のものごとの捉え方や考え方に活かす力。

エ　みんなと話し合って計画を立てることができる。

：グループでプレゼンテーションの内容を吟味し，発表計画を立てる力。

④コミュニケーションを行う力

キ　自分の気持ちや考えを，わかりやすく人に伝えることができる。

：自分の意志や主張を，根拠を示し，理由付けをして伝える力。

：古典の随筆の学習から得た現代に通じる内容を，自分の体験や見聞を交えてわかりやすく説明する力。

ク　他者の気持ちや考えを尊重し，理解することができる。

：目的，場面，文脈，相手との関係等の状況を理解する力。

：相手の発表のよいところを活かすように話し合う力

：相手の主張の意図を読み取る力や，相手の心や感情を想像する力。

③多面的・総合的に考える力（国語科としては共通事項として意識する力）

オ　いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる。

：短歌に用いられている言葉を替えることによって歌の内容がどのように変化するかを考える力

カ　日常生活や世の中の出来事を，様々な教科等の学習内容とつなげて考えることができる。

（２）深い学びの過程について

前述のこれまで本校国語科がねらいとしてきた「論理的な思考力の育成」の経緯をもう少し具体的に述べると，「筋道を立てて，相手がより理解・納得して受け入れるような意見を述べることができ

る力（『論理的に伝え合う力』）」（本校研究紀要第54号平成24年），「論理的に伝え合う力を高める言語活動と評価」（同55），「論理的な思考力を高める手立ての工夫」（同56）である。一貫して言えるのは「論理的」というキーワードであり，これまでの研究は「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」①③④の育成のための基盤となるものとも言える。平成24年度の「相手がより理解・納得して受け入れるような意見を述べる」は④コミュニケーションを行う力の基本であると考えられる。平成25年度は「伝え合う内容の質を高めるべきである」という課題から，読み取った内容を根拠として理由づけ・主張，さらに相互評価につなげる学習活動が行われたが，これは③多面的・総合的に考える力の基礎となるものである。平成26年度の「論理的な思考力を高める手立て」として授業実践に取り入れた論理的表現の型，様々な読解の方法，批判的な視点などは①代替案の思考力（批判的に考える力）や③多面的・総合的に考える力を培う土壌であると考える。

これらの研究を基礎として，平成 26・27 年度の研究から得た課題を鑑み，教材の内容的・空間的・時間的「つながり」や能力・態度の「つながり」を持たせながら，国語科で学んだ思考力・判断力・表現力を活用し，学習内容と持続可能な社会づくりの課題，さらには生徒自身との関連づけができるように指導していくことが，生徒の「深い学び」に収束していくものと考える。

（３）教材の「つながり」について

カリキュラムマップ上（28･27 年度研究紀要）に記載した題材と，つながりを持った他教科および単元は以下の通りである。(28 年度教科書改訂で削除したものを含む。)

実践事例①１年生「短歌の世界」Ⅱ～俵万智の歌から～

実践事例②１年生「大人になれなかった弟たちに……」－美術科「鉛筆画」

実践事例③２年生「新発明のマクラ」－英語科「The　Pillow」

実践事例④２年生「生物が記録する科学－バイオロギングの可能性」－理科「動物のなかま」

実践事例⑤２年生「徒然草」

実践事例⑥３年生「*能『八島』」－音楽科「能の魅力を探ろう」

－社会科「伝統文化の継承と創造」

＊ 27 年度は能『羽衣』

実践事例⑦３年生「江戸からのメッセージ」－社会科「江戸のエコ社会」

実践事例⑧３年生「おくのほそ道　松島･平泉」－社会科「江戸時代　元禄文化」

詳しくは次ページからの 28 年度の実践事例を参照されたい。(実践事例③⑦は，27 年度紀要を参照されたい。)

本校が設定した分野としては，「環境，地域文化財・世界遺産，国際理解，平和，その他」に関わるものであった。また，つながりを持った教科としては，社会科，理科，音楽科，美術科，英語科であった。これらの結果から，題材本文の内容が他教科で扱う学習内容と直結しているもの（理科や社会），古典のように伝統的な日本文化と深い関わりを持つもの（社会や音楽），同じ題材を多面的・多角的に扱うもの（英語や美術）などがつながりを図りやすいと考えられる。

このように個別の事例を見ると，カリキュラム上のある程度の傾向は見えてくる。しかし，国語科が本来持つ言語学習という側面を見失わないようにしなければならない。国語科で学習する言語能力の基礎は，他の教科で行われる言語活動の基盤であり，習得した言語能力は国語科はもちろん他の教科の学習活動やあらゆる場面で活用されるものである。ＥＳＤの分野にこだわらずに教材・教科とのつながりを考えた場合，国語科で学習する言語能力の基礎は，全ての教科に関わっていると言えるのではないだろうか。

1　題材名　「短歌の世界」Ⅱ　～俵万智の歌から～

2　ねらい

短歌の内容を表すのにふさわしい言葉とその根拠を考えることができる。

3　学習活動

（１）短歌についての既習事項を振り返る。

前回の短歌の学習で学んだことを振り返らせる。（中学生の歌・リズムなど）

（２）俵万智の短歌の空白にあてはまる言葉を選択肢から選び，その根拠を述べる。

最初は選択肢を設け，その中からふさわしい言葉を考えさせるようにする。異なる意見が出てきた場合には，それぞれの根拠について意見交換させる。

（３）俵万智の短歌の空白にあてはまる言葉を考え，その根拠を述べる。

次は選択肢をなくし，４人の班ごとに考えさせる。同一歌を複数班に与え，答えが異なる場合には，どれがふさわしいかについて全員で意見交換させる。本歌と異なる言葉であっても，根拠がそれなりに説得力のあるものであれば，本歌を紹介した上で，その良さを指摘してやる。また，それによって歌の内容がどのように変わるかということも考えさせる。

（４）問題解決場面

「それぞれの短歌にふさわしい言葉とその根拠を考えよう」

前回よりもやや大人の発想が必要な恋の歌を中心に提示する。歌の内容を想像して短歌の空白にふさわし言葉を，選択肢の中から選んだり，自分で考えたりして当てはめさせる。歌にふさわしい言葉は最終的には１つに集約されるが，考える過程で様々な答えが出てくることも予想される。そのような場面は，多面的・総合的に考える力の育成につながると同時に，代替案の思考力の育成にも通じるものであると考える。そのような点からも，上述のように，本歌と異なる言葉でも，説得力のあるものであれば不正解とはせず，その言葉を用いることによって歌の内容がどのように変わるかを考えさせる。

【使った短歌の例】　寄せ返す波のしぐさの優しさにいつ言われてもいい（　　）

１．愛してる　２．ありがとう　３．さようなら　４．好きだよ　（正解は３）

4　ＥＳＤとの関連

（１）構成概念

Ｉ多様性…言語表現は用いた言語によって多様性が生まれること。

（２）能力・態度

①代替案の思考力

イ　他者の意見をふまえて自分の意見を建設的に述べることができる。

【教科等の力】その歌に用いられている様子や心情を表す言葉に注目して作品を理解する力

（３）教材の「つながり」

①ＥＳＤ関連分野　　その他

1　題材名　「生物が記録する科学」

2　ねらい

事実と考えを区別して捉え，筆者の考えを整理して説明することができる。

3　学習活動

（１）事実と筆者の考えを区別して捉え，内容を理解する。

・各自がバイオロギングで調査した結果を項目別に整理してノートにまとめる。図と文章の関係も踏まえて，筆者がどんな考えにたどり着いたかを明らかにして書く。

（２）フリップを用いて，わかりやすく説明するためには，どのような工夫をすればよいか，班で話し合う。

・発表原稿，フリップの担当を決め，話し合いながら作成する。

（３）二つの班をペアとし，お互いの説明を聞きあい，フリップが効果的に使われているか，わかりやすい説明となっているかを検証する。

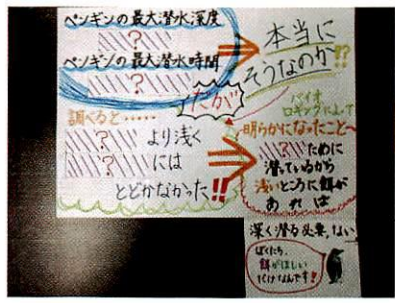
・視点はフリップを効果的に使っているかに絞る。

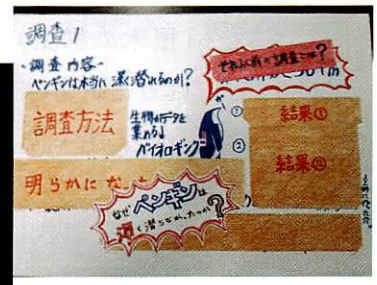
・わかりにくい点をお互いに話し合い，それを受けて自分たちの班の説明を改善していく。

〔例〕・フリップのどこを説明しているか分からない。

・説明していることがフリップには書かれてない。

・フリップにはグラフが書いてあるが，説明では触れられていない。





・フリップを指し示しながら説明するとわかりやすい。

（４）全員がフリップを用いた説明をする。

・自分が説明することで，内容を整理し，より深く理解することができる。

（５）筆者の考えるバイオロギングの可能性について各自で考え，まとめ，自分の考えを持つ。

4　ＥＳＤとの関連

（１）構成概念

Ⅱ多様性…バイオロギングによるペンギンの生態の研究が人間の思考できる範囲を広げることができる。

（２）能力・態度

④コミュニケーションを行う力

キ　自分の気持ちや考えをうまく人に伝えることができる。

【教科等の力】事実と考えを区別して捉え，筆者の考えをフリップを用いて整理して説明する力

（３）教材の「つながり」

①ＥＳＤ関連分野　生物多様性

②教科　理科

③題材　「動物のなかま」

1　題材名　「徒然草」

2　ねらい

古典の世界で描かれていることと自分の体験や見聞を結びつけ，わかりやすく文章にまとめることができる。

話し合いを通して，作者が伝えたかったこと，現代にも通じるところについて理解を深めることができる。

3　学習活動

（１）調べた話と同じような体験や見聞を書く。

・各自が体験や見聞と重ねて，現代でも起こりうる出来事をワークシートにまとめる。

（２）まとめたことを班で発表する。

・古典とのつながりを意識してわかりやすく説明する。

（３）徒然草の話はどのようなところが現代に通じるかを班で考え，話し合う。

・「現代にも通じる［　　］」とし，［　　］にあてはまる言葉を班で一つに絞る。

・その言葉を選んだ根拠を明らかに説明できるように話し合う。

〈生徒のエピソードとそこから考えられる現代にも通じる［　　］の例〉

・「榎木の僧正」の場合

自分も同じようにあだ名をつけられた経験があり，あだ名を呼ばれないようにいろいろと工夫したが，結果は「榎木の僧正」の話と全く同じ展開になったという経験。

⇩

「現代にも通じる［冷静に行動することの大切さ］」

・「二本の弓」の場合

テニスの試合のサーブで，一球しかないと思ってサーブをすると入るが，もう一球あると思ってすると心のゆるみがあって入らないという経験。

⇩

「現代にも通じる［気の緩み］」

（４）班の代表が次時の発表の予告として「現代にも通じる［　　］」を発表する。

・説明する話の簡単なあらすじと併せて発表する。

・次時の発表を意識して，自分たちの班をアピールできるようにわかりやすく話す。

（５）他の発表を見て，次時の活動の参考とする。

4　ＥＳＤとの関連

（１）構成概念

Ｖ 連携性…古典の世界とのつながりを意識して，人の気持ちや考えを捉える。

（２）能力・態度

④コミュニケーションを行う力

ク　他者の気持ちや考えを尊重し，積極的にコミュニケーションを行うことができる。

【教科等の力】話し合いを通して，作者が伝えたかったことや現代に通じるところについて考える力

1　題材名　「能　八島」(加賀宝生)

2　ねらい

・古典芸能「能」について興味を持ち，学ぼうとする。

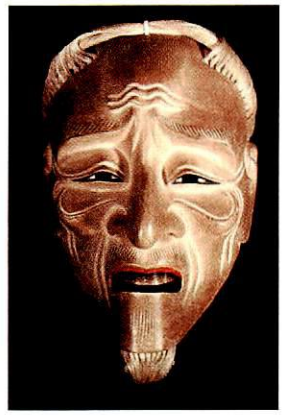
・様々な観点から「能」という古典芸能の世界について考えることができる。

3　学習活動

（１）能の題材「八島」について知っていることを発表する。

２年生の古典で学習した平家物語の「扇の的」や「弓流し」のエピソードを振り返り，時代や登場人物等について知っていることを発表する。また，八島の戦いに関連した能の演目であることや，社会科で学んだ世阿弥の作であること等を知る。

（２）プリント資料やスライド資料を使って，「能」の基礎知識について知る。



能「八島」について，あらすじ，能面，衣装，舞台，謡い，舞い，楽器など，スライドを見ながら知る。

（３）観能教室で鑑賞する際に注目して「観点」を考える。

興味を持った観点から，能を楽しむために，より具体的に見所を考える。

【評価】様々な観点から「能」という古典芸能の世界について考えることができたか。

（４）互いの見所を交流する。

ペア，グループでとどのような観点で能を楽しむか交流する。その後，面白いと思った観点を全体に紹介する。

（５）観能する。

７月上旬の金沢市観能教室に参加し，事前に設定した観点や見所に注意しながら能「八島」，を鑑賞する

4　ＥＳＤとの関連

（１）構成概念

Ｉ多様性…地域に根付く古典芸能を様々な観点から鑑賞することができる。

（２）能力・態度

②未来像を予測して計画を立てる力

ウ　過去や現在の情報に基づいて，未来を予想・予測することができる。

【教科等の力】

他の意見を参考にしながら観点を持って「能」を鑑賞し，その魅力を表現する力

（３）教材の「つながり」

①ＥＳＤ関連分野　世界遺産・地域文化財

②教科等　・音楽　・社会

③題　材　・能の魅力を探ろう　・江戸時代「都市の繁栄と元禄文化」

1　題材名　「おくのほそ道　松島・平泉」

2　ねらい

・芭蕉の生き方考え方について関心を持つ。

・本文や俳句の特徴を捉え，表現の仕方や世界遺産・国特別名勝に指定された歌枕などについて自分の考えをもたせる。

3　学習活動

（１）万葉集の和歌から今日の短歌・俳句に至る歴史的背景や経緯の概要を知る。

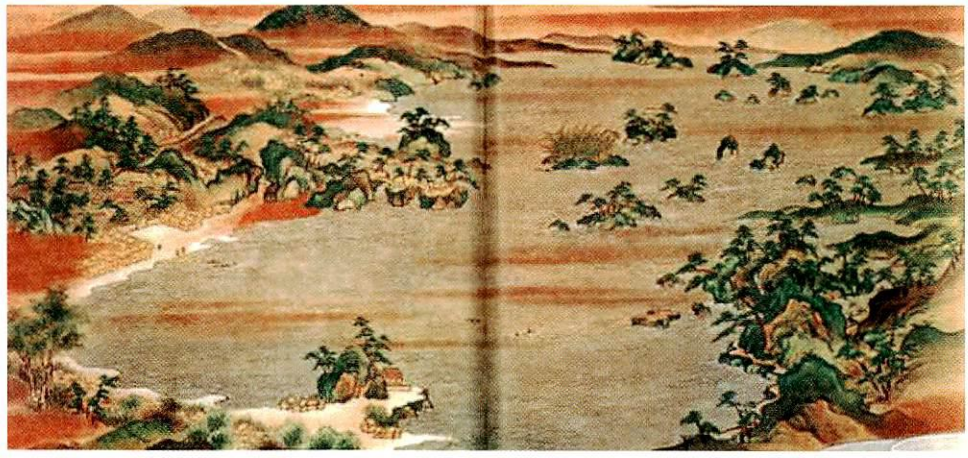
同単元（いにしえの心と語らう）内の万葉集・古今集・新古今集の学習から現代に受け継がれる詩歌や俳句の流れを年表等を使って大まかに知る。

（２）芭蕉の「旅」への思いを想像する。

プリントや資料集を活用し，冒頭の文言から，おくのほそ道の①旅の出発に際して芭蕉がどのような思いでいたかを想像する。

（３）冒頭部に記載されていた地（松島・白河の関）における芭蕉の思いを想像する。

松島で作句を断念した芭蕉の思いを，本文の記述から想像する。また，国の特別名勝に指定されている松島について，東日本大震災後の現在の姿，さらには芭蕉訪問後150年で隆起し現在様変わりした象潟との比較を通じて，自分の考えを持つ。



（４）平泉の記述から，芭蕉のものの見方や感じ方を捉える。

草むらとなった平泉と保存された金色堂について，芭蕉の感じたことを読み取り，自分の考えを持つ。

4　ＥＳＤとの関連

（１）構成概念

Ｉ有限性…人生や自然に対する作者のものの見方や感じ方を読み取り，自分の考えを持つ。

（２）能力・態度

②未来像を予測して計画を立てる力

ウ　過去や現在の情報に基づいて，未来を予想・予測することができる。

【教科等の力】

表現や作者のものの見方・感じ方について，根拠を明確にして自分の考えをまとめる力

（３）教材の「つながり」

①ＥＳＤ関連分野　世界遺産・地域文化財

②教科等　・社会

③題　材　・江戸時代「都市の繁栄と元禄文化」

1　題材名　「大人になれなかった弟たちに……」

2　ねらい

文章の記述と挿絵の両方をふまえて，作品の内容の理解を深めることができる。

3　学習活動

（１）作者の思いを言葉にする。

①第９場面(P107L13～最後)の記述から作者の思いを考える。

「弟が死んで九日後･･･その三日後･･･そして六日たった･･･」

「ひもじかったことと弟の死」，「一生忘れません」

「ヒロシマ，ナガサキ」(生徒ワークシートより)

②２枚の挿絵から作者の思いを考える。

・背景にある鳥（鳩？）
・鳥の数，色の濃さ
・母の涙
・赤ちゃんが無表情
・母の髪が少し乱れている
・母の頬が少しこけている
・母は口を引き締めている（生徒ワークシートより）

③題名から作者の思いを考える。

「弟たち」，「に」，「……」

（２）グループで意見交換し，思いを表す言葉を精査する。

（３）グループでまとめた意見を全体で共有することで，自身の読解の幅を広げる。

4　ＥＳＤとの関連

（１）構成概念

Ｉ多様性 … 文字による表現と絵画（鉛筆画）による表現とを比較し，それぞれの解釈を深めることで，表現方法の多様性に気づくとともに作品を複数の視点から総合的に捉える力・態度を身に付けること。

（２）能力・態度

③多面的・総合的に考える力

オ　いろいろな側面やいろいろな人の立場からものごとをとらえることができる

【教科等の力】

登場人物の行動や情景描写から心情を読み取る力

記述・挿絵の両面から，内容の理解を深める力

（３）教材の「つながり」

①ＥＳＤ関連分野　平和

②教科　美術科（１年）

③題材　「鉛筆画」

3．成果と課題

（1）成果

「代替案の思考力」に関して（実践事例①）

中学校に入って初めての短歌の学習となった一回目の学習で用いた，中学生の作った歌に対する生徒たちの理解が予想以上に良かったため，二回目はやや大人の発想が必要な俳万智の恋の歌を題材とした。中学１年生にはやや難しいかとも思われたが，思春期に向かう生徒たちの興味・関心は強く，喜んで学習に取り組んでいた。

歌の内容を説明する場面では，少しはにかみながらも，男女を問わず自分なりに説明しようとする姿勢が見られ，学習の題材としては良かったのではないかと考えている。

「未来像を予測して計画を立てる力」に関して（実践事例⑥⑧）

《生徒の感想より》

・「一つの旅を通して涙を流したり，景色を見て感動したりした芭蕉の旅を自分も訪れたいと思った。・・・時が過ぎていくうちに風情のある自然や人工物が消えつつあるが，大事にしていきたい。」

・「芭蕉が後世に残したがっていた様々な美しさを私たちも守っていくべきだなと思った。」

・「松島が一番印象深いので一度は訪れてみたいと思った。これも芭蕉の書き方のせいなのかなと思う。」

・「芭蕉が訪れた場所の中で，佐渡などいくつか行ったことがあるので，その句も調べたい。また，自分が好きな句が詠まれている場所にも行ってみたい。」

・「芭蕉のように，前もってたくさんの知識を身に付けた上で景色を見ることで，新たな視点に気づけるのだと思いました。」

これらの感想から，日本にある地域文化財や世界遺産などについて興味･関心を持ったとともに，守りたい・伝えてきたい・もっと詳しく知りたいといった未来指向的な視点を身に付けていると考えられる。特に５つ目の感想からは，芭蕉の時代から見て古文と言える文献について，芭蕉自身が精通していることや歌枕についての豊富な予備知識を持っていたことを作品の記述（その特徴）から読み取っている。さらに，そうした知識の裏付けによって，また新たな視点に気付くことができるという知識の広がりにまで言及している。これは，生徒自身が古典文学を読む上で，単なる後繰りではない楽しみ方を知ったということに他ならない。

「コミュニケーションを行う力」に関して（実践事例④⑤）

授業では積極的に話し合う活動を取り入れ，「コミュニケーションを行う力」の育成を図ったが，特定の人が発表したことを答えとし，全員で話し合ったことを答えとしていないなどの状態が続いた。そこで「よい話し合い」とは何かを示し，各自目標を設定した。また，話し合いの際はそのルールを確認し，話し合う目的や考える視点を明確化した。その結果，わかりやすい発表の仕方を意識し，構成を考えて話すことや相手の意見を踏まえて自分の考えを話すこと，聞き取るポイントを意識して相手の意見を聞くことができるようになった。

特に，聞き取るポイントを焦点化して，何を学ぶために発表を聞くのかを明らかにしたことにより，相手の意見を受け止め，それを自分の考えと比較したり，自分の考えに反映させたりすることができるようになった。

（2）課題

「代替案の思考力」に関して（実践例①）

今年度１年生に育成することをねらいとした「代替案の思考力」を本校では「他者の意見をふまえて自分の意見を建設的に述べることができる」力としている。本来，客観的な根拠を示すことなど論理性が求められる分野であり，国語科の範疇でいえば，「説明的文章」の領域で育成されるべき能力といえよう。しかし，この思考力は生徒の発達段階によってかなり差が生じることが予想され，特に中学１年の生徒たちには「代替案」を提示することに困難が予想された。そこで，本実践ではあえて題材を「文学的文章（韻文）」とし，生徒たちに題材に対する興味・関心をもたせつつ，そこからこの思考力を深める手がかりを見出そうと考えた。

本来，是か非かを問われるような「代替案の思考力」の育成に，考え方によっては幾通りも答えが考えられるような，短歌の言葉選びが結びつくかどうかが今後検討すべき課題であるが，題材とする歌の選び方次第では，代替案の思考力の育成につながる可能性があることを実感できた実践であった。

「未来像を予測して計画を立てる力」に関して（実践例⑥⑧）

総合芸術としての「能」を，国語（古文）の切り口から学習するとき，作品の背景や人物，エピソードなどのたくさんの予備知識を持たせる必要がある。音楽や社会の授業との連携を図った方がやりやすい上，得られるものが多い。

古典学習を「未来像を予測して計画を立てる力」に関連付けることは可能であるが，結局は「現状維持」を保つのみという答えに陥りやすい。地域文化財や伝統文化については，ほとんどの場合すでに保存の方策がとられていたり，町おこしの材料などに活用されていたりと，生徒が考察する幅が限られてしまう。何を目的にどこまで予測するか，「未来像」の限定条件から設定することや，現状の課題解決をテーマとすることなど発展的考察に向かう可能性もあるが，本来の国語学習から離れていくように思われる。

「コミュニケーションを行う力」に関して（実践事例④⑤）

話し合いの際に，公平で対等な関係であるのかという点においては，まだまだ課題が残る。自分の意見は発表できても，目標に向かって建設的に意見を述べているか，話し合いができているかということについては，一人一人が意見を述べて，よいものを一つ選ぶという感覚が捨てきれない面もある。活発に話し合うことを目標とするのではなく，よく考え，よく練り，様々な視点から捉え，考えを深めていけるような話し合いを目指していきたい。